

## 乳房の銀杏

岩瀬の小松神社に大人が七・八人もかかえるような大きないちじょうの樹があります。これは乳房の銀杏といわれて「お乳がよく出るように……」と、ご婦人方に信仰されてきました。このいちじょうの樹は遠い遠い昔、平重盛の遺骨を葬りその上に植えたものだといわれています。

小松殿といわれた賢臣重盛は、邸が六波羅の東にある小松谷というところにあった事からその一門を「小松家」といわれました。

重盛は平家滅亡の運命を感じとると、阿弥陀堂を建て灯籠で飾って浄土を念じ、「私の命をどうぞ浄土にお召し下さい」と、出家してきびしい修業をつみ、おしまれてこの世を去りましたが、このように小松一門の人々はみな淋しく絶望的なそして悲嘆な気持ちを信仰でささえ、思い思いの美しい心で世を去っていきました。

平家の重臣「肥後守貞能」も重盛の妹妙靈尼や弟知盛と共に平家の「行く末頼もしからずや思いけん」と、滅亡を憂い東国に落ちのびました。そして都をはなれる時に重盛

の墓を掘り起こし、骨を高野山や重盛が建てたという小松寺や重盛の供養のために建てたという小松寺などに移して、重盛の菩提を弔いました。それから長い長い鎌世代も時代が流れ大いちじょうの樹は脈々と重盛の忠孝の心をついで、近郷近在の多くの人々から親われる乳房の銀杏の信仰をあつめました。

「おごれる人も久し

からず ただ

春の夜の

夢の如し

……」と

枝葉の繁

みに悲し

く美しく平家

物語りの追想を絵

巻のごとくしのばせてくれます。

※六波羅 京都鴨川の東、五条と七条との間の地。

